

ヨハネによる福音書 3章 31～36節

今月の箇所は、2章の終わりにも似て、繋ぎの挿入句のような感を与える箇所となっています。しかし、繋ぎ的な箇所だからといって、どうでもいい箇所ではない。そうした部分にこそ時として、信仰の核心に触れる本質的なメッセージが隠されてもいる。そのことは、以前申し上げたかと思えます。

そもそも、今回の語り手は誰でしょうか。そこから読み解きを始め、その証言の内に入った何が置かれているのか、メッセージの中心へと進んでゆけたらと願います。

語り手

- ・今月の箇所は前段からの続きで、語っているのは前回同様 バプテスマのヨハネです。

「上から来られる方は、すべてのものの上におられる。

地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。

天から来られる方は、すべてのものの上におられる」(31)

- ・今月の箇所は、「上から来られる方は・・・。地から出る者は・・・。天から来られる方は・・・」と始まっています。
- ・バプテスマのヨハネの言葉として、イエスは「上から来られたお方」「天から来られたお方」だが、自分は「地から出た者(=この世に生まれた人間)」にすぎない、と語るものです。
- ・ヨハネの弟子たちの中に、自分たちの師が新参のイエスに出し抜かれていると感じ、イエスに妬みの心を燃やす者たちがいたのでしょうか。
- ・ヨハネは、そうした弟子たちに向かって言います。「イエス・キリストは天から来られた。神の御許から来られた。自分もまた、その御支配のもとにある」。そう語って、嫉妬に囚われる弟子たちとは対照的に、イエスにその場を譲ったのでした。

「地から出る者は地に属し、地に属する者として語る」(31)

「この方は、見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない」(32)

- ・実際、バプテスマのヨハネは、自分は「地に属する者として語る」と言っています。つまり、「自分もまた、神について語りはする。しかし、自分は地に属する者であり、神を直接、目の当たりに見たわけではない」と言わんとしているのではないのでしょうか。
- ・いわゆる二次証言にしかすぎない、ということです。
- ・けれども、「この方」は違う、と言います。「この方」とは、イエスのことです。
- ・そして、その言葉は一次証言であって、だからこそそれは信頼に足る、と言うのです。

- ・ということは、どこにおられた どのような存在として、イエスは考えられているのでしょうか。
- ・そして、だとしたら 何をどうするように、と言うのでしょうか。
- ・が その一方で、この世の現実はそれほど甘くはありません。「だれもその証しを受け入れない」と言います。
- ・それにしても、なぜなのでしょう。私たちはなぜ、イエスの証しを受け入れないのでしょうか。
- ・理由はもちろん いろいろあるかと思いますが、なかでも その一つとして、聖書の信仰には「^{つまず}躓きの真理」が置かれているように思われます。その躓きとはいったい、どんなものなのでしょう。

〔参考〕使徒パウロの回心（使徒言行録 9：1～19a、22：6～16、26：12～18）

- ・この ^{つまず}躓きについて考える契機として、今回は「使徒パウロの回心」と呼ばれる出来事を取り上げてみたいと思います。
 - ・使徒パウロは周知のとおり、旧名・サウロ。「パウロなくして、キリスト教なし」とまで言われる、キリスト教史上最大の伝道者です。
 - ・ユダヤ教のリーダーとしてキリスト教徒迫害の先頭に立っていた人物が、一転、そのキリスト教のリーダーになる。そうした数奇で劇的な生涯を生きた、^{まれ}稀に見る人物でもありました。
 - ・そのパウロの回心の出来事の内に、聖書の語りかけとして 私たちは何を見るか、ということです。
 - ・まずは、出来事の全体をじっくり読み直し、問題に思いをめぐらしてみましょう。
 - ・その問題とは すなわち、この回心の出来事と関連してしばしば問われる問いで、聖書の信仰の躓きと無関係でない問題です。つまり、なぜパウロが使徒とされたのかという、パウロが選ばれた その理由です。皆さんは、どう思われるのでしょうか。どうして パウロが選ばれたのか？
 - ・しばしば耳にする説明として、次のようなものがあります。
- パウロはユダヤ教のエリートでひとときわ教養があり、旧約聖書にも人一倍 通じていた。しかも、ギリシア語を話し、ローマの市民権も持っていた。つまり、ユダヤ教、ギリシア文化、ローマ政治という、世界伝道に必要な 3 つのものを全部 身に着けていた。神はそれらのものを身に着けていたパウロに目を留め、^とそれらが揃っていたので、だからパウロを選び、それらを御自分の働きのためにお用いになられたのだ。
- ・真相ははたしてどうなのでしょう？ 聖書的に考えてどうなのか、ということが重要に思われます。
- *参照 マタイ 3：9、フィリピ 3：4～9、ガラテヤ 2：16

「^{あか}その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認したことになる」(33)

「御子を信じる人は永遠の命を得ている」(36)

- ・そのようななか、しかし、ヨハネは言います。「その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認したことになる」(33)
- ・「その証し」とは、イエスの証言のことです。
- ・そして、ヨハネが「確認した」と語る言葉は、原語のギリシア語 (^{エスフラーギセン} ^{スフラーギゾー} ἐσφράγισεν < σφραγίζω)

では「証印を押して保証する」ことを意味しています。今日の言い方では捺印をして内容保証をすることで、契約書などの法的文書に同意のしるしとして証明の印を押すことです。

そのように、イエスの言葉と行ないを神を証しするものと認め、そこで示された神を真実なお方と証言するということです。

・そのようにして イエスの証しされる神を受け入れるとき、権利書が土地や建物の所有を保証するように、永遠の命の保証がすでに私たちに与えられている (36)、とヨハネは語ります。

「御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる」
(36)

- ・ちなみに、神の怒りに関する 直後のこの言葉についてはどう考えられるでしょうか。
- ・下されるのではなく「とどまる」というのですから、それは初めからあったことにならないでしょうか。
- ・だとしたら、この一節ははたして、どんなことを意味しているのか。一考の要があるように思われます。

*参考 申命記 30：15～20

・・・・・・・・・・・・・・・・

イエスの証しがなかなか受け入れられない理由とは何なのでしょう？
聖書の信仰に「躓きの真理」があるとしたら、それはいったいどんなものなのか？
そして、それは聖書の語る福音とどんな関係にあるのでしょうか。